

被災地におけるフィールドワークの試み*

森 暢 平**

目 次

1. はじめに
2. 富岡町とおだがいさま FM
3. 調査概要
4. 調査結果
5. 学生の意見
6. おわりに

1. はじめに

筆者は2013年度、成城学園教育研究所研究助成を受け、臨時災害放送局聴取者調査を通じた被災地教育と名づけた実践を行った。具体的には2013年5月と11月の2回、文芸学部マスコミュニケーション学科の学生を引率して、宮城県山元町の応急仮設住宅を訪れ、臨時災害放送局「りんごラジオ」の聴取者調査を実施した。その報告は、助成を受ける前である2012年の調査と併せ、『成城学園教育研究所研究年報』第36集にまとめられた。震災直後のりんごラジオに対する評価は高く、状況が落ち着いた後は町議会生中継、「学校・保育所・幼稚園だより」が人気となっていたが、ラジオから情報を得る必要性は減っており、リスナー減少が課題になっていた。被災者の方々の実際の話聞いたことで、「被災者の気持ちを少しでも和らげることができた

* 本稿は成城学園教育研究所2014年度研究助成「臨時災害放送局聴取者調査を通じた被災地教育の実践」の報告書である。

** 成城大学文芸学部マスコミュニケーション学科

ならよかった」「親切にしてもらったことが印象的」と感想を述べる学生が多かった。

2014年度は同じ名前で、新たに申請し、2回目の助成を受けることになった。東日本大震災にかかる臨時災害放送局は2016年2月現在、9市町10局が東北地方に存置している***。研究対象を広げることでより知見を深めるとの趣旨で、別の放送局の調査を考えた。申請時には宮城県亘理町の臨時災害放送局「あおぞら」の調査を計画したが予定があわず、2014年6月14日に福島県富岡町で行う「おだがいさまFM」（所在地は福島県郡山市）の調査を行った。宮城県は津波被害が甚大であったが、福島県はそれに加え、原子力発電所事故による災害が現在進行中で続いている。その比較によって、被災や復興について学生により多面的に考えさせようという趣旨である。調査の参加者は、筆者が担当する「マスコミ基礎演習Ⅰ」（前期）の受講者（主に2年生）であるが、過去2年間にこの授業を履修した3、4年生の参加も認めた。

2013年度までの調査では、福島の原因問題はなるべく避けてきた。放射線被害の関係から実際に調査に行くことの困難が予想され、さらに被害が継続中の現場での調査も学生には難しいという二重の困難が予想されたからである。方針を変えたのは、地震から時間が経過し、外形的には事態は少し落ち着いてきたという事情を勘案した。調査場所である、郡山市富田町若宮前の応急仮設住宅の放射線量は0.1～0.2マイクロシーベルト/時であり、東京よりもやや高めであるが、除染の目標基準である「毎時0.23マイクロシーベルト」を下回っている。

学生たちは、福島現状を見て、何を感じ、何を考えたのだろうか。現場に行くことで学生は何を学べるのか。あるいは、どのような難しさがあるのか。東日本大震災という未曾有の震災の現場、それも災害が複合的に起こっている福島で、学生を教育することの有効性と困難性について考えるのが、本稿の目的となろう。

*** 2016年3月で岩手県大槌町、宮城県女川町、亘理町の3局が閉局し、宮城県気仙沼市ではコミュニティ放送局に衣替えする予定。

2. 富岡町とおだがいさま FM

富岡町は、福島県浜通り地方にある。震災時（2011年3月）の人口は1万5827人。南隣の楢葉町との境界に東京電力福島第二原発がある。町は、事故を起こした福島第一原発（双葉町、大熊町）から半径20キロ圏内にすっぽりと入っている。福島第一原発の事故にかかわる帰還困難区域、居住制限区域、避難指示解除準備区域のいずれかに入っており、全町が避難区域である。つまり、全町民が避難生活を送っている。

町役場機能、町議会などは福島県郡山市に移転し、いわき市、三春町、大玉村に役場支所・出張所が置かれている。応急仮設住宅があるのは、いわき市、三春町、福島市、大玉村の13カ所。

避難先はいわき市5990人▽郡山市2788人▽福島市395人▽三春町298人▽大玉村190人ほかなど県内に計1万826人。県外では東京都711人▽茨城県633人▽埼玉県522人ほかなどで計4315人となっている（2016年1月現在、県内県外あわせた避難者1万5141人）。

富岡町が2014年8月に実施した住民意向調査（調査は世帯ごとで、3979世帯が回答）によると、プレハブ型の応急仮設住宅に住んでいるのは14.1%、借り上げ住宅が35.8%、有償の民間賃貸住宅が16.8%、町外の持ち家が19.3%ほかとなっている。帰還の意向については、現時点で町に戻りたいとする世帯が11.9%、決めかねている世帯が30.7%、戻らないと決めている世帯が49.4%ほかで、若者層になるほど戻らない意向の世帯が増えている。

富岡町は震災の翌年（2012年）、少なくとも5年間（原発事故から6年間）は「全町民の帰還は困難かつ不可能」と判断したが、現在では、早ければ2017年4月の帰還開始を目標に掲げている。

この町のメディアとして、おだがいさま FM が開局したのは、2012年3月11日。その経緯は以下のとおりである。

事故から2カ月が経った2011年5月27日、富岡町から1000人以上が避難生活を送っていた郡山市の多目的施設「ビッグパレットふくしま」にミニ FM 局が開局した。エフエム福島との協力で、放送は毎日午後7時からの2時間。富岡町社会福祉協議会が運営する形だった。

放送は同年8月30日、避難所の閉鎖に併せて一度、休止したが、避難生活を続ける住民から「ラジオがなくなって寂しい」などと再開を望む声が寄せ

られた。このため富岡町社会福祉協議会はラジオ放送再開を模索。微弱電波を利用するミニFMでは聴取できる範囲に限りがあることから、より広範囲に放送できる臨時災害放送局として申請することになった。ただ、臨時災害放送は被災地に開局することが原則。町は、郡山市富田町若宮前の応急仮設住宅と同じ敷地にある「おだがいさまセンター」（生活復興支援センター）にスタジオを置く計画を立てたが、郡山市自体は原発の被災地ではない。このため困難はあったが、許可権者である東北総合通信局は「原発事故の影響で郡山市に役場機能を移転している富岡町が、郡山市に避難している住民にきめ細かな災害対策情報や生活関連情報を提供する」という名目で申請を許可した。なお、「おたがいさま」ではなく、「おだがいさま」と「た」が濁るのは、富岡町の方言を強調するためである。

町民には、町からタブレット端末が配布され、町からのお知らせや、町内のライブ映像をインターネットを通じて確認することができる。おだがいさまFMの放送も、過去の放送分も含め、タブレット端末からアクセスすることができる。すなわち、電波（76.9MHz）は郡山市のスタジオ（おだがいさまセンター）からおよそ5キロ以内に住む人にしか届かないが、その他の地域に避難する人でも、タブレット端末を通じて、いつでも放送にアクセスできるようになっている。

現在は、平日は8時から9時、11時から11時半、12時から12時半、17時半から19時半の4回、土曜日は12時から13時の1回、独自の放送を流している。パーソナリティは、社会福祉協議会の職員や、フリーアナウンサー、お笑い芸人などである。

おだがいさまFMでは、「役に立つ」情報だけでなく、町の人がつながりを感じられるような、「どうでもよい」と思われる放送もあえて行っている。避難生活のなかでは、「誰が結婚した」「誰が入院した」などの身近な情報が伝わらない。放送する側がそうした話をするわけにはいかないが、町民をゲストとして呼び、何でもないおしゃべりをすることで、人と人のつながりを感じることができればとの考えからである。また、とくに富岡の方言を強調し、富岡の言葉を使って放送することを心がけている。いつか故郷で生活ができるというような希望もてる放送、孤独感や不安を忘れるような放送を目指しているとのことだ。

3. 調査概要

調査は、2014年6月14日、郡山市富田町若宮前の応急仮設住宅にて日帰りで行った。参加者は2年生15人、3年生4人、4年生2人、ティーチングアシスタントである大学院生1人の計22人。前述したとおり、おだがいさまFMのスタジオが入る「おだがいさまセンター」は、この郡山市富田町若宮前の応急仮設住宅と同じ敷地内にある。

調査当日の簡単な日程は以下のとおり。

〔日程〕

- 7時20分 JR 大宮駅集合
- 8時33分 JR 郡山駅着
- 9時 郡山勤労福祉会館で、『毎日新聞』郡山支局長の浅田芳明氏から、被災者の現状についての話、質疑応答
- 10時 タクシーで応急仮設住宅に移動
- 10時20分 おだがいさまFMの吉田恵子氏から、放送内容などの話、質疑応答
- 12時45分 応急仮設住宅での調査開始
- 16時45分 調査終了
- 18時30分 JR 郡山駅発
- 19時22分 JR 大宮駅で解散

学生たちは調査の前の授業において、質問項目の作成、おだがいさまFMの聴取、倫理問題の学習などにあたった。倫理問題について学生は以下の注意を受けた。すなわち、協力しつながらない人に無理に調査を行わないこと、言葉遣いや言動が調査対象者の不快にならないよう十分気をつけること、調査の目的を十分に説明し納得してもらってから調査を始めること、調査をいつでもやめることができることを事前に調査対象者に説明することなどである。その点に関連し、必要なのは富岡の被災状況に対する事前の学習であった。これについては、授業で時間をかけたほか、調査当日、『毎日新聞』の浅田芳明郡山支局長、およびおだがいさまFMの運営にあたる富岡町社会福祉協議会の吉田恵子さんから話を聞いた。

調査日は土曜日であり、吉田さん自身が12時から1時間、生放送番組を担

当している。この日は、翌日にブラジルで男子サッカーワールドカップ（W杯）で日本の初戦が予定されていた。おだがいさまセンターには日本代表の長友佑都選手が激励に来たことがあり、町民の女性と吉田さんが翌日のW杯について語るという内容であった。学生たちはスタジオの外からその模様を見学した。

4. 調査結果

調査は22人が2人一組となり、応急仮設住宅を個別に訪問する形で行われた。各住宅のポストに前日、調査への協力を呼びかけるチラシを投函し、調査を周知したが、チラシを読まない家庭も多かった。調査前、学生たちが調査の趣旨を説明して、了解が得られた場合のみインタビュー調査を実施した。その際、調査結果公表に当たっては実名など本人が特定される個人情報報告書では使わないこと、聞き取った内容はこの調査だけに利用すること、調査結果が被災者の生活の向上につながるような可能な努力を行うことなどを約束した。なお、調査にあたっては、富岡町と仮設住宅の自治会から許可を取り、協力を受けた。自治会からは、「事情によりこの家庭は調査をしないでほしい」とお願いされた世帯があり、その仮設住宅は訪問しなかった。

結果的に、調査できたのは、28組34人。昨年度までと同様に30分程度の調査が多かったが、2時間近く話し込む被災者もいた。

前回調査では、宮城県山元町のりんごラジオをどう聞いているのかを、トランスクリプトに起こして報告した（『成城学園教育研究所研究年報』第36集）。今回は、人に焦点をあて、語りの形式で報告したい。すべてを記述するわけにはいかないので、前回と違う特徴のある語り、主におだがいさまFMに否定的な意見を紹介する。

（1）Aさん（80代男性）

学生が、ドアをノックし、趣旨を説明すると、Aさんの妻が、「じゃあ、中へ」と仮設に招き入れてくれた。前の日に配られたチラシを見て、念のため、お菓子を用意して待機していたようだ。以下は、夫であるAさんの話を取り出して、まとめたものだ。

富岡町にあるJR夜ノ森駅の商店街で個人商店を営んでいた。でも震災

の2、3年前にやめた。大手スーパーができて経営が苦しくなったから……。東電が福島第二原発をつくり始めた昭和50年ごろは、景気が良かった。豆腐屋とか肉屋とか、商店街には店が3、40軒もあって、住みやすかった。スーパーができると1カ所で買い物できるから、店もだんだんやめていった。

震災はかつてない揺れだったよ。震度6強ということだけど、古い家だから震度7ぐらいに感じたかな。電気も水道もストップ。何もすることがないから、家で寝ていたわけ。テレビも見ることができず、何があったのかさえ、分からない。翌日、町の有線放送が流れて、「避難しなさい」となった。ガソリンがちょうど満タンだったから、隣の家の人を乗せて、西隣の川内村まで避難した。そこで初めて、地震の概要と原発事故のことを知った。

そうしたら3日目に今度は川内村も危ないということで、郡山市のビッグパレットに避難することになった〔話しながら、棚からファイルを取り出す〕。これは避難した時の写真、3月20日ごろかな。配布された毛布が1枚だけで、段ボールを敷いても寒かった。風呂なんて20日間は入れなかった。そんな暮らしが4カ月も続いた。

おだがいさまFMはちょうどいまも聞いていた。12時からの番組、いま出演していたのは幼稚園の職員だった人。8時からの番組も、17時半からの番組をよく聞くよ。避難していた時、ラジオが1個ずつ配られた。だからだいたい聞いていた。たまに演歌もかかるし……。

役に立つのは、東電の人が賠償の説明に来るとかその類の情報。タブレット端末ももらったけど、80過ぎた者には難しい。いっぺん使ってみたけど、物置に入ったまま。

おだがいさまFMは2回出たことがある。最初はグラウンドゴルフ大会で優勝したから。吉田恵子さんに「出て」って言われて。グラウンドゴルフはもう2年ぐらいこの仮設でやっている。ボランティアの皆さんがグラウンド作ってくれて。結構みんな、楽しんでいる。この仮設住宅、あまり人通りがないでしょ。家に引っ込んでいる人が多い。でもおだがいさまセンターでイベントあるときに、みんなが会うのはいいことだ。夜の森の近所の人もうバラバラだから。この仮設も同じ富岡の人だけど、まったく顔を知らない人もいる。

調査時間は約1時間。仮設住宅暮らしを前向きにとらえ、グラウンドゴルフなどを楽しんでいることが分かる。おだがいさまFMだけでなく、おだがいさまセンターで行われる行事にも積極的に参加して、孤独にならないようにしている。同じ富岡でも、知らない人がいるから、いろいろな人と話して仲間をつくっているようだ。ただ、高齢のため、タブレット端末は使えないのだという。インタビューのあとは、お菓子をいただきながら雑談し、「東京から日帰りじゃ大変ね」とねぎらいの言葉までかけてもらった。

調査ではこうして、前向きな話をしてくれる人が少なくなかったが、逆におだがいさまFMに否定的な人も多かった。

(2) Bさん(70代男性)

学生がドアをロックすると、ドアの横にある小窓を開いて、「何ですか」と聞いてきた。そのまま小窓ごしに10分間、調査をさせてもらった。

おだがいさまFMは聞いていない。何度か聞いたことはあるけど音が汚い。ガーガー雑音が混ざる。若者の曲が流れても、私らの世代には全然分からない。たぶん、町民の90%ぐらいが聞いていないのじゃないか。

震災の時は、たしかにラジオから情報を得た。ラジオを通じて福島の内容を知った。だけど、おだがいさまFMは内容が狭い。この辺りの情報だけ。富岡の町民の人がゲストで出てきて話しているけど、町民の話なんて興味ない。しかもラジオとなると、話してはいけないこともあるでしょ。だから本当に言いたいことが言えない。ここだけの話、みんな、こびを売っているのだよ。暇だから、おだがいさまセンターに行っている人はいるけど、それは町の側に立つってこと。それが悪いと言っているわけじゃないのだが……。

町の政策についても、おだがいさまFMについても不満を持っているようだった。前述したとおり、ラジオは「役に立つ」ばかりでなく、一般の町民に出演してもらうなどつながりを意識した放送を行っているが、Bさんはこれを「町民の話なんて興味ない」と断じた。さらに、おだがいさまFMを聞く人や、おだがいさまセンターの行事に参加する人たちを、町側に立つ人と

位置づける。

町民には、町政への不満も多い。おだがいさま FM では、不満を直接放送することはできないだろうと冷めた目で見ている。

(3) Cさん (76歳女性)

Cさんは一人暮らし。震災後は西日本にいる娘の家に行ったが福島に帰ってきて、応急仮設住宅での生活は半年ちょっと。はじめ病気を理由にインタビューを断っていたが、調査の趣旨を説明すると、学生たちを家に招き入れ、こたつに入りながら、話を始める。調査は1時間半に及んだ。

おだがいさま FM は聞かない。同じことばかりだから。同じことと言われると切ないでしょ。思い出してしまう。震災の時の話をすると、妙に突っかかったり、エキサイトする人もいる。だから、ラジオでいろいろな話をするのもいいけど、同じ話ばかりだと、聞きたくなくなる。イライラしてくる。やっぱり思い出すのが切ない。忘れてせいせいしていると思っているところに震災の話だと頭が爆発して……。

原発が憎いわけではない。浜通りの人間は東電があったから、商売ができて……。けっして憎らしいわけではないけど、いざこうなってみると、切ないところがあるわけ。息子だって東電に勤めていた。結局、地震でこうなった。東電が、わざと爆発させたわけではないから、東電は恨まない。

この間も、NHK が取材に来た。「何も話すことない。東電は恨んではない」って答えた。

Cさんは最近倒れて入院し、酸素吸入をすることもある。西日本の娘の家に行ったが、いまは戻っている。福島に住む別の娘が毎日来てくれて、面倒を見てもらっている。学生に干し柿やコーヒーをごちそうしてくれ、帰りに土産まで持たせたくれた。けっして、他人と断絶しているわけではないが、病気もあり、娘以外の他者とは関わらないことが多いようだ。

おだがいさま FM を聞かない理由は、同じことばかりだからだという。ラジオは震災の話だけを流しているわけではないが、聞くと思い出して、「切なく」なるというのだ。

Cさんはもともと富岡町で商売をしていた。それを失い、避難生活も西日

本へ行き、再び福島へ戻るとい生活の大きな変化が続き、さらに病気をし
てしまう。さまざまなストレスを抱え、震災の辛い思いを思い出すような内
容は聞きたくないのだ。

調査の最後に学生が「協力ありがとうございました」と伝えると、「言いた
いことが言えてよかった」と答えてくれた。

(4) Dさん (70代女性)

Dさんは、訪問すると、玄関で立ったまま、1時間も話をしてくれた。夫
と2人暮らし。ストレスを感じるからあまり人づき合いはしないというが、
学生には親切に対応してくれた。政府、富岡町、マスメディアのいずれにも
不信感を持っているようだった。

仮設生活をしていて、仮設で生活をした人でないと分からないことって
あると思う。私は高齢者であと何年しか生きられないって考えて、いま住
むところがないわけ。この仮設は年寄りが多くてね、皆んな共通して感じ
ているのは、悩みじゃなくて、不安。安心した生活が送れてないのね。

社会福祉協議会の人たちが一生懸命やっているのにラジオを聞かないの
は、申し訳ないとは思う。でも意地悪じゃなくて、ラジオ聞いて、「だか
らどうすればいいの」って思ってしまう。私は、自分なりに一生懸命生き
ているけど、明日が見えない。年寄りだから、寝たら明日起きられるかど
うか、それが不安なの。

だから、私は外出して、誰かとお茶飲むとかしない。ストレスがかかる
から。いままで私、病気は他の人がなるものだと思っていたけど、結局、
医者や薬がいらぬ病気になるんだと思う。いろいろな人がこの仮設住
宅に来て、イベントをやってくださるけど、芯から喜べないのよ。ありが
たいのだけど。

マスコミの人が来てインタビューするけど、どうせ私が話をしても「テ
レビではぜったいに流さないから話したくない」というのが正直な感じ。
どうせ自分たちに都合のいいように放送するだけ。言ったことをね、伝え
てくれないから。

Dさんは、おだがいさま FM はまったく聞かない。いまの生活が不安で、

復興とか、絆という前向きな言葉が頭には入ってこないからだという。

震災まで約30年間、住んでいた家も、住めなくなり、その家から家電製品が大型トラックに向かって投げられるように詰め込まれるのを目の前で見て以来、今後の暮らしに不安を持つようになった。これから復興住宅に入居できたにしても、家賃を徴収されるのが不安要素。それなら、病院も近く、家賃がいないこの仮設になるべく長く、住もうと考えている。

出口のない不安感のなかで、みんなで支えながら前を向きましょうという趣旨の放送に共感できないようだ。社会福祉協議会や、支援の人たちには感謝の気持ちを持っているが、素直にはありがたがれない気持ちがあるのだという。

(5) Eさん (70代男性)

Eさんは、妻と2人暮らしである。ノックをすると出てきてくれ、そのうち妻も戻り、部屋にあげてくれ、話してくれた。清涼飲料水を出してくれるなど親切にしてくれたが、FMについては否定的な話が多かった。

おだがいさま FM を聞きたいとは思わない。この仮設住宅に入居して時間がかなり経ったが、おだがいさまセンターには1回も行ったことがない。好きではないから。楽しい人には楽しいと思うけど、人それぞれの好みがある。

震災に関する報道が減っているのは仕方ない。時の流れだ。あなたたちはどう思う。毎日、震災や原発事故を誇張して放送されるのと、自然と忘れられていくのと。私は、かえって忘れられたほうがいいと思う。いつまでも尾を引くのじゃなく、忘れて次のステップへ進んだほうがいいのではないか。

私は行政も悪いと思う。富岡町の行政が悪い。どうせ戻れないのなら、富岡町に中間貯蔵施設をつくるのも方法としてはありだ。

とにかく前へ進まない。この仮設住宅で、前へ前へ進もうとしている人がいると思いますか。私から言わせれば、進めない人がいるのは、おだがいさまセンターがあるからだ。楽しいのに慣れたら富岡に帰りたいたいと思わなくなる。みんな暇で、おだがいさまセンターに行ってしまう。1日がそこで終わる。だからあのセンターもあっていいようで悪いのかもしれない

い。

Eさんのもの言いは逆説的だ。おだがいさまセンターがあるから、逆に復興につながらないという。また、もう町に戻れないのなら、放射線廃棄物の中間貯蔵施設を町に建設してもいいのではと考えている。

おだがいさま FM だけでなくマスメディア全般についても都合のいい報道しかしないと信は置いていない。それならば、かえって震災のことなど忘れられたほうがいいのではという意見だ。

(6) 総括

ここでは5人の語りを挙げた。Aさんを除く4人は、おだがいさま FM だけでなく、メディア全般、そして行政に対しても批判的であった。

全体的に言えば、28組の調査対象者のうち、5組がおだがいさま FM を素直には評価できないという回答で、9組が積極的に評価、残りは「聞いていない」などの答えだった。評価できない人たちは5組だけだったが、宮城県山元町での調査と比べると格段に多い。山元町の応急仮設住宅においても、コミュニティラジオが町の政策に批判的でないことを理由に否定的な意見があった。だが、その割合は、富岡町はかなり多かった。

そこには、津波の被害のみの場合と、そこに原子力災害が加わった場合の大きな差異、被害の長期化という点での差異があるだろう。富岡町においては、2017年4月の帰還開始が目標とされているが、そこから帰還が順調に進むかどうかは不透明である。除染作業が進んではいるものの、なお、放射線量が高い場所があり、一部の人が帰還できたとしても、元のままの町が復活できる可能性は少ないだろう。そんな不安のなか、早々に、町に戻らない決断をした人もいて、応急仮設住宅に住む人たちの迷いは多い。

一般論でいえば、時間を経たあと被災者の間にも被害や復旧の格差が出始めるといわれる。取り残された人は虚脱感、怒り、ある場合は、うつ気分になることも報告されている。

おだがいさま FM はそんな不安を解消し、富岡に戻れる希望をつなぐメディアとして存在するが、そのこと自体に共感できない被災者が存在するというのが今回の調査の発見といえよう。一般に、臨時災害放送局は、被災者の心を癒し、元気づけるメディアとして評価されるが、原子力災害のように、

被害が長期化し、被災者の復興状況事態が二極化する状況では、すべての人を元気づけられるわけではないし、逆に反発を受けている状況も存在するのである。

5. 学生の意見

まずは、はじめて被災地を訪れた2人の学生の感想を紹介したい。いずれも、学生自身のフィールドノートに書かれた最後の総括の文章である。まずは、2年生女子の意見から。

インタビューをした半分の方はFMに対して好意的であった。富岡町を中心とした身近な情報を知ることができ、娯楽としても楽しみにしているということだった。とくにゲストで知人が出ていたりすると楽しく感じるという人が印象的だ。おだがいさまFMは何よりも富岡町のことを考え、町民に寄り添う貴重なメディアだ。今日まで放送が続いているのも、富岡町の人びとのさまざまな思いが込められているからではないか。

しかしながら全員が全員、このFMに対し、好意的なわけでもない。ローカルな話題が取り上げられることに対し、「好き勝手に話しすぎ」「聴取者がいることを忘れていないか」と否定的な意見もあった。おだがいさまFMが存在することで復興に気持ちを切り替えられないという厳しい意見もあった。

このように意見が多様であることは、現地を訪れて初めて分かる。私たちは、東京に住み、震災のことを考えなくても生活できる。だが、福島には、まだ仮設に住み、あすのことを心配しながら生きている人びとがいる。その悩みは個別的でさまざまである。だから、被災地、被災者をひとくりにして考えてはいけない。

つづいて、2年生男子の意見から。

被災地について考え始めたのはこの授業をとってからのことで、福島問題についてはほとんど何も知らなかったのも、ただ、驚くことが多かった。

仮設住宅でみなさんに話をうかがうと、先の見えない未来に不満を抱いていた。私たちがインタビューした方々は、おだがいさまFMに好意的な

人が少なく、みんなが聞いているという訪問前の想定はくつがえされた。メディアに対しても、不信感が強く、被災者についての情報が正しく伝わっていないと考える意見が目立った。

だが、辛い状況のなかでも、前向きに生きようとする方々がいた。大事なことは、震災や原発事故を風化させないこと。被災者の方々が何を思っ
て何が必要なのか。それを知ることが大切なのだと感じた。

最初は、現地にはさまざまな意見があり、それは現地に行ってしか分からないという意見である。ふたつめの意見も現地に行って、人びとの考え方が分かり、被災者の気持ちを忘れないことが大事と書いている。

2年生主体の今回の調査は、まずはフィールドに出て、真摯に人びとの声に耳を傾け、それを記録することが目的であった。その範囲に限れば、目的は達せられた。しかしながら、今回は、それだけではくれない重さがあった。おだがいさま FM のスタッフたちは、日々かなりの努力を重ね、被災者たちを元気づけようと奔走している。そして、放送を楽しんでいる被災者も数多くいる。ところが、「復興へ」という呼びかけ自体に懐疑的な気持ちを持ち、おだがいさま FM を楽しむ気持ちになれない人も多い。学生たちは、その現実に呆然とし、どう考えればいいのか分からなくなったのが正直なところであろう。これはつぎのような意見からも分かる。

テレビでよく「復興する被災地」というがあるので、そういうイメージをもっていたが、実際、福島で話を聞いてみると、被災者の方の苦しみや悩みは簡単に理解できるものではないと感じた。今回のような被災地調査だけでなく、ボランティアのような慈善事業でさえ、やる側の自己満足になりかねない危険もある。被災者の立場を考えての行動だったとしても、それがほんとうに被災者のためになっているのか、難しさを感じた。

学生たちが現地に行き、福島の現場を見る。そこから得るものは少ない。しかし、そこで見聞きした現実にはあまりに重く、半年間の基礎演習という授業のなかでは消化しきれない。参加した学生のなかから、福島の現実にもう少し関わってみたいという学生が出たり、社会に出て以降も福島の現実を考えつづける学生が出てくれればこの授業が成功したといえようが、その

答えが出るのはまだ先のことだ。

6. おわりに

今回の調査は、2012年から始まった被災地調査の総まとめという形になり、これまで手掛けた宮城県山元町との比較調査として福島県富岡町の調査を行った。調査結果としては、臨時災害放送局に批判的な人びとが想定していたより多く存在することが判明した。被害の長期化で、復興に向けて前向きな放送を流すおだがいさま FM について、違和感を覚えたり、関わることに前向きになれない人が存在するのである。

「臨時災害放送は被災者を元気づけている」という通説的な理解／常識を覆すような結果に対して、学生も驚いたような反応が多く、実際、現地で調査することの意味は小さくなかった。こうした現実は、マスメディアがほとんど報じないことであり、学生たちがマスメディアのあり様（たとえば、その抑圧的な性格）について考えるきっかけを与えただけでも今回の調査を実施する意義はあっただろう。ただ、こうした簡単には答えの得られない問題について、学生たちはどちらかといえば戸惑ったほうが多いように感じられる。3年次の演習、4年次のゼミナールなどを通じて、これからも被災地に関わる教育を継続することが重要だと考えられる。